人文研創立50周年
記念講演「災害と人文科学」
2教授が研究内容報告

アルメニア地震の調査内容を報告する大矢根教授

人文科学研究所（伊吹克己所長）の創立50周年を記念した今年度第2回となる公開講演会「災害と人文科学」が1月27日、生田キャンパスで開かれた。人文科学の広い視点から災害を考察するもので、今回は大矢根淳人間科学部教授（災害社会学）が災害からの復興について、湯浅治久文学部教授（日本中世史）が災害の記録について講演した。

大矢根教授は「テレビの特集番組で、震災後の様子を目にしたことが研究の出発点となった」という1988年のアルメニア地震について取り上げた。

集合住宅など建物がほぼ崩壊した震央のスピタク市で、2010年からほぼ毎年行っている実地調査を報告。30年たった現在も仮設住宅で暮らす人、仮設住宅にすら入居できない人がいると語った。

阪神・淡路大震災など日本の例も挙げ、「生活再建のための道筋や期間は、国の体制の違いやその時々の経済事情により異なる。しかし、時間がかかろうとも『終の棲家』への道筋を明らかにすることが、復興政策の原点だ」とまとめた。

湯浅教授は日本の中・近世における災害研究の現状と課題を論じた。

災害の様子を伝える史料として各地の出来事を編年的にまとめた年代記に着目。1184～1871年までの大平郷（現・静岡県沼津市大平地区）について記した『大平年代記』から中世の記録を抜粋し、土豪による水門の建築などの開発、災害と災害対応の記述を挙げた。

「中世は小規模の災害と共存する社会で、河川の氾濫などの被害は日常的なものと捉え、記録していない。公的な救済システムもなく、公文書にも災害対応の具体的な記録、記述がほとんど存在しない。研究は途上で、歴史研究から災害研究にどうアプローチしていくかが課題」と語った。

法学研設立50周年
「対話」テーマに記念シンポ

会場と対話する教員㊤
「日本の社会に対話を」と語った暉峻氏㊧

法学研究所（前川享所長）の設立50周年を記念した公開シンポジウム「対話する国家・社会へ」が2月3日、神田キャンパスで開かれた。対話と民主主義の関係を説く経済学者の暉峻淑子（てるおかいつこ）埼玉大学名誉教授が基調講演。その後、第2部として、法学部の教員3人が「国際法・国際政治」「裁判員制度」「医療」について、「対話」をキーワードに報告した。

暉峻氏は1928年生まれ。軍国主義の時代に育ち、戦後は自由に意見を言える喜びを味わった。「ベルリンの壁が崩れ、東独の市民が公園でいきいきと対話するのを見て私の経験と重なった。対話のある社会、ない社会の違いを考えさせられた」と思索の原点を語った。

対話を「相手の人格を尊重し、対等な関係で、経験や感情を含めて語り合い、新しいアイデアや創造的な思考を生み出すもの」と説明した。応答し合うことで相互理解が進み、妥協ではない真の合意に到達できるとして、「熟議なしに物事が決まっていく日本の社会で、今こそ対話が必要ではないか」と述べた。

第2部の報告者は、妹尾哲志准教授（国際政治）、飯考行教授（法社会学）、家永登教授（医事法学）。報告に対し、それぞれ研究領域の異なる教員が別の観点から考察し質問を投げかける構成で、約80人の参加者を交え多様な対話が展開された。

妹尾准教授は冷戦時代の西独がどのように東西両陣営と対話し、一定の成果を上げたかを紹介。森川幸一教授（国際法）は、国内外の批判に直面しながら東西統一を成し遂げた要因を尋ねるとともに、朝鮮半島情勢について意見を求めた。

飯教授は導入10年目を迎えた裁判員制度について、国民の多くが裁判員経験者や裁判官など実務法律家と対話する機会がなく、制度への理解が進んでいないと報告。稲垣悠一法科大学院准教授（刑法）は、裁判内容に市民感覚を反映させる上での問題点を指摘した。

家永教授は、患者によっては自己決定権の保障が医事法学の目標のように言われるが、「患者が最も求めるのは、決定する権利よりも、医療者からの丁寧な説明であり対話だ」と語った。二本柳高信准教授（憲法）と新生児や認知症の人など自主的に判断できない場合は、誰がどのように判断するのかを話し合った。

キャンパスに小鼓の響き
人間国宝 大倉さん特別講義

生田キャンパス202教室に小鼓の音が響いた。濱崎加奈子文学部准教授の専門科目「伝統文化研究2」の特別講義として12月18日、能楽の人間国宝、大倉源次郎さんによるワークショップが開かれた。120人の学生は小鼓の歴史や打ち方を学び、能の世界に浸った。

大倉さんは能楽小鼓方大倉流十六世宗家。2017年、59歳の若さで人間国宝に認定された。

「鼓は日本オリジナルの打楽器だが、ルーツはアフリカにたどりつく」と話す。西アフリカに太鼓の音が言葉になるあるという。「トーキングドラム」があるが、鼓にもこの要素があるという。太鼓の文化は5～6世紀には日本に伝わり、自然環境や独自の文化の中で小鼓が誕生した。

小鼓はその時の気温や天候により音が変化するため、毎回打つ前に組み立てる。実際に大倉さんが組み立てていく手際の良さに、学生から感嘆の声が上がった。

小鼓は左手で鼓の革を締めている調べ緒（しらべお）をつかみ、右肩にあて右手で打つ。学生はこれをまね、鼓を鳴らす仕草をする〝エアー小鼓〟を体験。「イヨーッ」「ホッ」という掛け声とともに全員で五穀豊穣を祈る「三番三（さんばそう）」の一部分を演奏した。

大倉さんは「能楽の楽しみ方は千差万別。奏者の掛け声、打ち込み方などから、呼吸や息遣いなどを感じられるようになると楽曲そのものが楽しめるようになる」と能楽の魅力を語った。

小鼓を示して講義する大倉さん

エアー小鼓で演奏を体験する学生

外国語のススメ
外国語教育研究室

— 63 —

石川　和男　商学部教授

環境に身を置く

「ここでは喋（しゃべ）れなければどうしようもない」。これは滞在していた米西海岸のアダルトスクールで先生から言われた言葉。「ペーパーテストは完璧なのになぜ聞き取れないんだ」と続けられた。クラスは約30人だったが、不法滞在に近い人から官僚クラスまでいた。

アダルトスクールでは、コミュニケーションをとる大切さを学んだ。言語はコミュニケーションの道具だが、表情やジェスチャー、服装、持ち物なども道具である。スリランカ出身の僧侶は、笑顔がコミュニケーションの道具であった。当初、彼は私と同レベルの語学力だったが、多くのクラスメートがいつも話しかけ、その都度笑顔で応えていた。数カ月後、彼は喋る能力もかなり向上した。同じ人だけでなく、英語を母国語としない人たちとも多くコミュニケーションをとることで、語学力が向上することを感じた。

フェイスブック本社前で

現地校に通っていたわが子たちのクラスは、英語を母国語としないクラスメートが多数であった。しかし、1年経（た）つと英語でのコミュニケーションができるようになっていた。やはり、多くの人から刺激を受けることで語学力は上達すると感じた。

語学は、それが日常使用されている環境に身を置くのが最善である。ただそれだけでは上達しない。まずは言語以外でのコミュニケーションが大切で、多くの人からの刺激を受けられる環境をつくることだろう。その環境は、生田キャンパス10号館の横断歩道の向こうにもある。（担当は商学基礎）

※短縮版。全文はCALL教室ホームページで